

混住化地域で環境に配慮した黒豚生産と地域に根ざした養豚経営 - 都市近郊で養豚経営の定着に挑戦した改善方策の実践 -



有限会社 齋藤農園
(さいとうのうえん)
群馬県前橋市
設立年月日 昭和 59 年 2 月
《認定農業者》

推薦理由

齋藤農園は、前橋市中心部から 7 km 東方の住宅地域にあり、典型的な都市化の中で地域に根ざした経営を実践している。昭和 39 年にヨークシャー種の導入による一貫経営を開始し、昭和 52 年、ヨークシャー種から LWD に切り替え、順次飼育頭数を拡大しながら一時は種雌豚 100 頭規模にまで拡大した。しかし、混住地域での規模拡大の限界から、平成 8 年より LWD の他にパークシャー種を導入し、現在はパークシャー種のみ種雌豚 70 頭を飼養する経営である。

以下に評価された内容を示す。

(1) 都市化の中での養豚経営の確立

地域資源の稲ワラと麦ワラを敷料として確保し、たい肥化を通して有機質を提供するとともに、環境対策では畜産イメージを払拭する処理方式を採用して、地域と融和した養豚経営を樹立している。

また、当地域は都市化が進んでおり規模拡大による収益の向上には限界があることから、付加価値を高めるために肉豚の銘柄化を図り、契約販売を行うことで、価格安定を試みている。

(2) 仲間とともに築いた銘柄豚の生産

平成 8 年にパークシャー種を導入し、黒豚の生産に着手し、平成 12 年には全頭を同品種に変更した。その後、経営主がリーダーシップを発揮して「とんくろー研究会」を設立し、県産黒豚の普及を開始した。

とくに、トレースバックの取り組みとして、品種証明をと畜場、加工施設、販売店まで添付するシステムを構築して、加工・流通・消費者にわかりやすい豚肉の供給に努力して

いる。

以上のように齋藤農園は、周辺地域の都市化の進展にさらされながらも、発想と試行錯誤を繰り返しながら経営改善に取り組んできており、今後とも経営の安定的な維持発展を見込める事例であることから評価し推薦することとする。

(群馬県審査委員会委員長 水谷 富哉)

発表事例の内容

1 地域の概況

(1) 一般概況

前橋市は、群馬県の中央部からやや南に位置する県庁所在地である。平成16年12月に近隣町村との合併により人口32万、総面積241km²の新しい前橋市として生まれ変わった。市の北部は赤城山の中腹あたりから南面に緩傾斜をなし、中央部から南部にかけては標高100mの平坦地が連なっている。年平均降水量は比較的少なく、内陸性の気候である。

(2) 農業・畜産の概況

この地域の農業は、古くから赤城山南麓および榛名山東麓という立地条件と利根川水系の比較的恵まれた水利を活用して、米・麦・養蚕が盛んであった。昭和30年代以降の土地基盤の整備とともに、農畜産物の需給の動向を背景に畜産や施設園芸などの専業経営や複合経営の規模拡大が進んできた。

なお、前橋市は近隣町村との合併に伴い農業生産地域が拡大し、農業産出額も300億円を超える全国有数の農業都市となった。市では農産物生産をこれまで以上に重要なものと位置付け、農用地の有効かつ効率的な活用、および各地区の特性を活かした生産活動の活性化を強力に推進している。

現在の農業産出額は318億円であり、このうち193億円(約62%)が畜産である。畜産の内訳は、養豚39%、乳用牛30%、養鶏16%、肉牛14%で、養豚の占める割合が高い。

2 経営・生産活動の内容

1) 労働力の構成(平成18年7月現在)

区分	続柄	年齢	農業従事日数(日)		畜産部門 年間労働時間 (時間)	部門または 作業担当	備考
				うち畜産部門			
構成員	本人	59	350	350	4,550	飼養管理全般	経営主
	妻	57	300	300		飼養管理全般	
従業員	なし						
臨時雇	なし						

畜産部門年間労働時間については、平成17年1月~12月を参考に掲載した。

2) 収入等の状況(平成17年1月~12月)

部門	種類・品目	飼養頭数・面積	販売・出荷量	販売額・収入額	備考
畜産	肉豚	種雌豚 72.5 頭	肉豚 1,390 頭	59,733 千円	
	たい肥			1,298 千円	
耕種	水稻	作付面積 75 a		(所得:約 25 万円)	

3) 土地所有と利用状況

区分	面積(m ²)
養豚用地全体	8,111
うち建物・施設	4,311
うち畜舎	3,800

4) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績(平成17年1月~12月)

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		構成員	2.3 人	
			従業員	- 人	
	種雌豚平均飼養頭数			72.5 頭	
	肥育豚平均飼養頭数			450 頭	
	年間子豚出荷頭数			- 頭	
	年間肉豚出荷頭数			1,390 頭	
収益性	養豚部門年間総所得(構成員所得)			11,502,867 円	
	種雌豚1頭当たり年間所得(構成員所得)			158,660 円	
	所得率(構成員所得)			18.8 %	
	種雌豚1頭当たり	部門収入			841,808 円
		うち肉豚販売収入			823,898 円
		売上原価			683,097 円
		うち購入飼料費			374,221 円
うち労働費			124,138 円		
うち減価償却費			35,259 円		
生産性	繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.40 回	
		種雌豚1頭当たり分娩子豚頭数		20.0 頭	
		種雌豚1頭当たり子豚離乳頭数		19.7 頭	
	肥育	種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数			19.0 頭
		肥育豚事故率			4.7 %
		肥育開始時	日齢		60 日
			体重		30 kg
		肉豚出荷時	日齢		240 日
			体重		110 kg
		平均肥育日数			180 日
		出荷肉豚1頭1日当たり増体量			0.444 kg
		肥育豚飼料要求率			3.13
		トータル飼料要求率			3.55
		枝肉重量			73.0 kg
		販売価格	肉豚1頭当たり平均価格		42,973 円
枝肉1kg当たり平均価格			589 円		
枝肉規格「上」以上適合率			0.4 %		
出荷肉豚1頭当たり差引生産原価			34,695 円		
種雌豚1頭当たり投下労働時間			63 時間		

(2) 技術等の概要

経営類型	一貫経営	
地帯区分	都市・近郊地域	
飼養品種	種雌豚：B（パークシャー） 種雄豚：B（パークシャー）	
後継者の確保状況	他産業に従事（継承意向あり）	
飼養形態	SPF 生産の実施	なし
	繁殖豚の飼養方式	群飼
繁殖	人工授精の有無	なし
飼料	自家配合の実施	なし
	食品副産物の利用	なし
肥育	肥育面積（肥育前期）	1 豚房当たり 22m ² 、45 頭飼養
	肥育面積（肥育後期）	1 豚房当たり 9 m ² 、8 頭飼養
販売	加工・販売部門の有無	なし
	ブランド肉生産	上州銘柄豚「とんくろー」
	地産地消の取り組み	群馬県庁前の群馬会館食堂に食材提供
その他	協業・共同作業の実施	なし
	施設・機器具等の共同利用	なし
	共同堆肥センターの利用	なし
生産部門以外の取り組み	近隣住民へのたい肥供給と豚肉配布 幼稚園児等の見学受け入れ	

5) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	豚舎（鉄骨トタン）6、豚舎（木造トタン）、ハウス豚舎 4、ハウスオガコ舎 2、オガコ舎、たい肥舎、ふん尿ハウス、車庫 3、事務所
機械・器具	斜面草刈機、ホイールローダ、ダンプ、自動給餌器、スクリュウコンベアー、換気扇、ピットクリーナー、密閉縦型発酵機

6) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	一部分離
処理方法	繁殖豚舎：ハウスたい肥舎 子豚・育成豚舎：固液分離後、ふんは密閉縦型発酵機（コンポスト）で調製、尿は浄化処理後河川放流 たい肥製造量 ハウスたい肥舎：コンポスト = 4：6
敷料	たい肥舎：稲ワラ、麦ワラ コンポスト：オガクズ、ヌカ、古紙

(2) 利用の内容（固形分）

内容	割合（%）	用途・利用先等	条件等	備考
販売	8	園芸用	7,000 円 / 2t	
交換	20	米麦作農家（3ha）		
無償譲渡	12	近隣家庭菜園用		
自家利用	60	水田・畑（225a）		

3 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	経営・活動の内容
昭和 39	米麦 + 養蚕	繁殖豚 2 頭 肉豚生産	米麦・養蚕経営 ヨークシャー種を導入し、養豚業を開始
52	米麦 + 養蚕 + 養豚	繁殖豚 20 頭 肉豚生産	LWD 生産 米麦・養蚕経営、養豚部門を拡大
55	米麦 + 養蚕	繁殖豚 40 頭 肉豚生産	
平成 8	養豚	繁殖豚 100 頭 肉豚生産	LWD 生産を中心としつつ、パークシャー種（ 1 頭、 7 頭）を導入
12	養豚	繁殖豚 60 頭 肉豚生産	価格の安定対策としてパークシャー種のための飼養と する 県下 10 人の生産者ととともに、銘柄豚「とんくろー」 の生産を開始
15			とんくろー研究会を発足（会員 10 戸）
17	養豚	繁殖豚 70 頭 肉豚生産	年間出荷頭数 1,500 頭

2) 過去 5 年間の生産活動の推移

	平成 13 年	平成 14 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年
畜産部門労働力（人）	2	2	2	2	2
種雌豚飼養頭数（頭）	70	70	70	70	72
出荷頭数（頭） （肥育豚・廃用他を含む）	1,857	1,229	1,505	1,379	1,508
畜産部門の総売上高（千円）	72,702	52,680	60,907	58,620	61,031
主産物の売上高（千円）	70,554	50,763	58,234	56,771	59,732

平成 13 年の出荷頭数が多いのは、当時、一部 LWD を飼養していたことによるもの。齋藤農園では、平成 12 年に種雌豚を全頭パークシャー種に切り替えた。

4 特色ある経営・生産活動の内容

(1) 都市近郊での養豚経営の確立

地域条件を活かした養豚経営

米麦を中心とした耕種部門（自作地：水田 135 a、畑 90 a）と養豚一貫経営の複合による資源の経営内循環、さらに地域農業への有機質提供に取り組み、地域に融和した養豚経営を実践している。

環境対策

混住化地域であることから、環境対策に意を注ぐとともに、地域で活用できるたい肥の製造に心がけ、コンポストおよびたい肥舎による処理を行っている。生産たい肥は自家利用のほか、地域の米麦作農家や家庭菜園に提供しているが、不足をきたすほどである。

一方、尿污水处理は、回分式活性汚泥法による浄化処理施設を設置し、環境基準を満たしての河川放流を行っている。

銘柄豚肉の生産による付加価値の向上

現経営地において規模拡大によるスケールメリットを求めることは困難であることから、経営の安定的な存続と収益性向上のための対策として、付加価値のあるパークシャー種（黒豚）の全頭飼育に平成 12 年に切り替え、契約販売事業に取り組み、安全で美味しい「黒豚」の安定的な生産を実施している。

地域住民への理解促進

地域住民に養豚経営に対する理解を促進するため、たい肥の無料配布を行うとともに、年に二回、自家産豚肉を配布している。また、幼稚園児等の見学を受け入れている。

(2) 仲間とともに築いた上州銘柄豚「とんくろー」

「とんくろー研究会」を設立

平成 8 年パークシャー種の導入以来、平成 12 年には全頭をパークシャー種に切り替え、黒豚銘柄豚の生産に着手した。さらに経営向上と普及活動推進のために「とんくろー研究会」を平成 15 年に組織し、後進の育成等にリーダーシップを発揮している。

「とんくろー研究会」の概要

会 員 数:10 戸(上州銘柄豚「とんくろー」の生産農家)
会員の構成:47～75 歳
発足した年:平成 15 年
活動の内容: 銘柄豚生産の技術情報交換、 試食会の開催、 消費者対応 等
会 費 :50 円 / 出荷豚

なお、当研究会は県下で 10 戸からなり、年間出荷頭数は約 6,000 頭程度であるが、さらに拡大を図る意向である。

表 とんくろー研究会員(10 戸)の黒豚生産の推移

年度	平成 12 年	平成 13 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年
出荷頭数(頭)	3,000	4,000	5,000	5,500	6,000

トレースバックの取り組み

出荷にあたっては、銘柄を確立した平成 12 年から、生産豚が流通・消費の過程で認知されるよう日本養豚協会の品種証明書を 1 頭ごとに添付し、と畜場、加工施設、販売店まで付いていくシステムを取り入れている。代表の禎さんはリーダーシップを発揮して、この仕組みづくりについて生産仲間との合意形成を図ってきた。

銘柄豚「とんくろー」の普及活動

生産された銘柄豚「とんくろー」の消費者への普及を目的として、群馬県庁前の群馬会館食堂に食材として提供し、黒豚料理の普及を推進している。

また、県下の販売は各地域の A コープやスーパーから消費者へ供給する体制がとられ、評価が高まりつつある。

(3) 自然を原則とした家畜の飼養管理

飼養管理については、なるべく豚を自然に近い形で飼いたいという考えから、ケージ飼いはなく平小屋にし、肥育前期では約 22m²の豚房に 45 頭、肥育後期では 9 m²に 8 頭と密飼いにならないようにしている。また、繁殖豚には敷料として自家産たい肥と交換した稲ワラや麦ワラをふんだんに使い、豚にとって居心地の良い環境づくりに努めている。

なお、飼養豚舎については、LWD 飼養時代には規模拡大を図る過程でウインドウレス豚舎を建設してきたが、豚にとって最良環境とするには自然を重視することが重要との考えから、ウインドウレスを開放的に改造するとともに、分娩房を除き豚房方式から群飼い方式に変更するなど、飼育環境の改善による生産性の向上を図っている。

5 地域農業や地域社会との協調・融和のために取り組んでいる活動内容

(1) 地域社会のリーダーとして活躍

養豚業を経営するかたわら、JA 前橋市養豚部長、全農県本部「とんくろー研究会」会長、前橋市消防団長を歴任するなど、地域における社会活動や生産活動にリーダーシップを発揮している。

(2) 地域資源の循環型畜産を実践

たい肥と稲ワラ、麦ワラの交換を行い、家畜敷料として利用している。また、生産たい肥は地域に有機質資源として供給し、地域住民からも期待される養豚業として位置づいている。

(3) 銘柄豚肉の地産地消活動

県産黒豚の県内消費を浸透させるため、とんくろー研究会では県下全域から訪れる群馬会館食堂に食材として提供し、県産黒豚料理のメニューを通じて地産地消活動を行っている。

(4) 地域住民への理解促進

地域住民に養豚経営に対する理解を促進するため、たい肥の無料配布を行うとともに、年に 2 回、自家産豚肉を配布している。

(5) 農場見学の受け入れ

近隣の幼稚園児等の見学を受け入れている。

(6) 機械化組合でオペレーターとして従事

地域では機械化組合が組織され、稲や麦の収穫作業を受託している（組合員約 100 名、オペレーター 15 名で 45ha の受託作業を実施）。齋藤さんもオペレーターとして参加し、従事している。この活動を通じて地域の資源循環に貢献している。

6 今後の目指す方向性と課題

(1) 現状規模で生産性の向上

地域環境条件を考えると、現状規模が適正であり、これ以上の拡大は困難なことから、生産性の向上を図ることにより収益性の向上を目指していく。

(2) 地域に根ざした養豚経営

混住化条件の中で、臭気対策等環境面を中心にした対策を講じ、地域に根ざした畜産経営を確立していく。

(3) 後継者への継承のための環境づくり

現在、夫婦二人の労働力であるが、将来は長男が経営を継ぐこととなっている。より円滑に経営を移譲できるように、上記(1)、(2)に専念して経営を継続していく。

【写真】



管理の行き届いたハウス豚舎



開放的に改造された肥育豚舎



豚舎内のロール(豚がほぐし拡散する)



ビニールハウスを利用した稲ワラ貯蔵庫



農場の近くには民家が多い



敷料にはオガクズのほかに古紙も使用



浄化処理施設



黒豚証明書

